

「感謝経済」をめぐる“風景” 7

～ “越後屋”はついにいなくなるのか ～

ブロックチェーン技術はこれまでの商慣行やビジネスを変えるか

今回のコラムは、株式会社オウケイウェヴが進める感謝経済の事業の技術的根幹というべき、ブロックチェーン技術について少し触れたい。

その前に、本コラムのタイトルの「“越後屋”はついにいなくなるのか」の“越後屋”について断っておきたい。現在、日本国内で事業や商売をなさって「越後屋」の商号等をお持ちの方々と、本コラムの“越後屋”は一切関係がないこととお断りしておく。

本コラムの“越後屋”とは、日本の時代劇の中で、象徴的に出てくる、“不透明で悪徳な商売をするもの”のフィクション上の“商売人”という位置付けの表現ではないものである。（テレビや映画などでよく出るテロップ（字幕）などと同じ「このコラムに登場する“越後屋”はフィクションの中のもので、実際する人物・団体とは一切関係ありません」ということ）

私は古い昭和の人間ということもあり、時代劇は嫌いではない、というか好きでよく見る。時代劇中に出てくる“越後屋”のイメージはだいたい以下のようなものである。

越後屋 「お代官様、越後屋でございます」

（すると、越後屋は風呂敷に包んだ何か、菓子箱などを風呂敷に包んだ形状のものをそっと代官にチラ見せする）

（すると、代官もその風呂敷包みをチラ見し）

代官 「お、越後屋、気が利くのう」

（代官は少しだけ不敵な笑みを浮かべ、風呂敷包みの中のものが、“自分が所望するもの”であることを認識する）

（演出によっては、代官はチラ見しただけで「気が利くのう」などのセリフを言わないパターンもある）

越後屋 「お代官様好物のまんじゅうでございます」

（この「おまんじゅう」とか「お代官様の好物」とかのセリフは特に言わず、チラ見せした越後屋の風呂敷包みを少しずつ代官の方へだんだんよく見えるように動かす場合もある）

代官 （ニヤッと笑みを浮かべ、越後屋を見る、越後屋も少し笑みを浮かべなが

ら目配せなどをする場合がある)

代官 「んっ、越後屋、そうか、おぬしも悪よのう・・・」(意味深な笑みを浮かべる)

越後屋 (越後屋も笑みを浮かべながら)

「いえいえ、お代官様ほどでは・・・」

(代官、越後屋双方とも目配せをしながら双方をお互いに見て、さらに笑みを浮かべる)

だいたい、以上が、時代劇でよくある“越後屋とお代官様(悪代官)”の「密室商談」「密室謀議」「水面下不透明ビジネス、悪徳密談」シーンの一つの類型、一般的なパターンである。時代劇の台本はこのステレオタイプともいえる基本パターンを踏襲しながら、劇中の演出に合わせて“密談シーン”が多少のバリエーションを加えながら構成される。

多くの場合、江戸幕府内の役人である代官に対し、豪商等が賄賂を出し、幕府系の公の利権を手にしたたり、他の商売敵(しょうばいがたき)に公の事業とそれに付随する商売アドバンテージが行かないようにという、密室謀議が行われていた、と解釈されるものである。

21世紀の現在は、パブリックセクター(公的事业、政府事業)とプライベートセクター(民間企業、民間の事業)の間のビジネスは、公平性の担保の観点と、税金の不透明で不自然な支出を防ぐべく、多くは公開入札などがなされるが、時として、高度で深い政治的水面下シナリオで、21世紀の今も「越後屋と悪代官」、つまり、民間企業と政府高官ないし政治家の間の密談謀議が表面化することもある。この場合、契約等のプロセスは不透明なままで、不正競争を防ぐ観点の様々な法律で罰せられることになる。

一方、この“越後屋と悪代官”の密談が示すもう一つの意味は、政府調達系の話とは異なり、情報の非対称性(一部の特定の人物や勢力だけが圧倒的な情報を持ち、それによって、ビジネス上で圧倒的に有利な状況に結び付くこと)がもたらす状況の一つでもある。

自由競争の資本市場では、情報収集の多寡も含めた実力は事業/ビジネスの力であり、情報と資本力に勝るビジネス主体がさらに実力のある強いパートナーとアライアンスを形成することを妨げるものはない。

しかし、これが近代以降、現代以降の資本主義上のビジネスの慣行の一部である中、実は、一部大権力や大資本に近い一部の人物や勢力、団体にだけに偏った量的質的に不均衡な情報や資本の偏在があり、そのほかの多くの関係者には具体

的な情報やプロセスが公開されないまま、ビジネスや利益が形成されることも多いものである。それが良い場合、悪い場合、企業秘密の範疇における契約、交渉の条件である場合も多いし、広い意味の“販促費”的な目分量のおカネのやり取りも当たり前のケースも考えられるところはある。しかし、その一方で企業の社会的責任などは一顧だにせず、“他人や他社がどうなろうと自分だけよければ（儲ければよい）法律違反スレスレのアコギなことは何でもやっていい”という事業者が絶対に現れないという保証はない。お互いに「おぬしも悪よのう・・・」という前提を十分確認した上でデータの意図的改ざん等に手を染める勢力もある可能性がある。

昨今、ビジネス界だけでなく、ひろく国民の人口に膾炙するまでになったブロックチェーンという言葉、そしてブロックチェーン技術は、簡単に言えば、データが、分散型台帳がチェーン（鎖）のように繋がっていて連結される中にあり、分散してすべてのデータが保管されるデータベースで、途中のプロセスでのデータや情報の改ざんが行われないようにする技術、である。

途中経過のプロセスの改ざんが行われて最も信頼を失うのは金融機関や、個人情報に関連して資産や資金の管理が行われる事業分野であることは間違いないが、例えば、農産物等の安心・安全を担保するためのユースケースなどでも有用であり、産地偽装、成分量/成分表示偽装、賞味期限偽装、消費期限偽装などを防ぐことができる。また、多くが相対取引で、値決めに不透明感もある一部の不動産取引とそれに関連した数値インデックス等の実務の面でも、本当の経済的価値、経済合理性を踏まえた、気配の価格、適正相場観、などをたどることにも使えたとされ、現在、様々なビジネス分野、産業分野でブロックチェーン技術の実装の具体化やその研究が盛んである。

正当な経済価値、多くの人々が納得する経済価値とその根底となるデータ（情報やナレッジの集積の場合もある）の透明性を担保する技術の出現は、これまで情報の非対称性を利用したり、圧倒的な資本力、資金力だけが市場や事業を席卷しやすい状況を変えることにつながる可能性は高い。

多くの人々が社会通念、社会常識、社会と自分の関わりと他人への感謝、良心など、素直な真心と経済社会の接点のあるべき姿から来る新たな価値指標の創出はたやすいものではないと思う。

しかし、感謝経済の試みは、こうした、ある意味不公平な部分を残した社会をブロックチェーン技術も駆使し（※株式会社オウケイウェイヴが進める“感謝経済”の事業で、人々からの評価の積み重ねになる複数の指標データなどは、ブロックチェーン技術でその透明性はすべて担保されるものである）変革することになげたいというものであることを今回のコラムでは簡単に説明しておきたい。

“越後屋と悪代官の密室謀議”的なものが 21 世紀の今も世界中のそこかしこでも繰り広げられ、根絶されていないことは世界の様々な経済事件関連のニュースを眺めているだけでもよくわかる。

途中のデータとプロセスをすべてトレースして辿れることが可能になり、透明性が担保され、情動的にも公平性が確保された中の競争が、標準のビジネス環境になる日、“越後屋”や“越後屋的なもの”が世の中からなくなる日は、将来本当に到来するかもしれない、とも、最近思う。

（最後は、人間の心の中に住む、“魔が差す”“悪魔の部分”というところがどうか、という点との相克が今後も同時に続いていくことも、真実であろう）

【株式会社オウケイウェイヴ ミッション（企業理念/目的）】

互い助け合いの場の創造を通して、物心両面の幸福を実現し、世界の発展に寄与する



株式会社オウケイウェイヴは 2018 年 4 月、より多くの人々が活躍できる社会を目指した新たな経済圏『感謝経済』の考え方と、その実際的な経済活動具現化のためのプラットフォームを開発した。2018 年 9 月以降はこの事業に国内の 20 社を超える企業や団体も参画し、新たな概念の事業が注目されている中、できるだけ中立的に、「感謝」と「経済」、「互い助け合い」と「経済」の在り方、新たな社会と経済の在り方などを、月 1 回のペースで、「感謝経済」をめぐる“風景”と題して、コラムを連載し、所感や考察などを示していく。



大山 泰 オウケイウェイヴ総研 所長

1961 年東京生まれ。一橋大学経済学部卒。株式会社フジテレビジョンで経済部長、経済担当解説委員、等を歴任。BS フジ「プライムニュース」など報道番組で経済解説を行う。内閣府/公正取引委員会「競争政策と公的再生支援の在り方に関する研究会」、農水省「政策評価第三者委員会」など、複数の政府の有識者会議等の委員を歴任。